

1917年 (大正6年) [13歳]

「辰雄日誌1916」No. 4 (2)

— 1917年1月1日～4月2日 —

小池辰雄

高等師範(現筑波大学) 附属中学校 1年

○1917年1月1日 (月)

午後9時まで晴天、午後9時より雨天。正月元旦(紀元2577年)。起床6時。起きれば元旦の太陽は東天を紅に染め、御光は天を貫くばかり、東天は益々賑やかにめでたき色を見せる。整えて先ず神様を拝し、仏様を拜んで、座敷に行く。

(日本はこれだからよい) [短評]

膳に向かつて先ず初めに、おめでとうございますと言って、例の口上を言う。それを大きいものから段々に言う。終ると屠蘇を廻す。しかし僕は呑まなかった。その度に、おめでとうございますといった。次にいよいよ、箸を取る。めでたく楽しく食べた。

やがて支度にかかった。8時15分頃に家を出た。国旗をめたく閃き、人は笑顔に往還していた。途中、岡山君に会った。学校へ行けば、おめでとうの声、此処彼処に聞こえ、何ぞめ何ぞめと喜び遊びあっている。喜びは運動場に満つ。やがて鐘が鳴って講堂へ入った。嘉納校長の話されたことはよく身に入れて置いた。真に過去の一年を顧みると、落ちていた所がある。今年からは改めて回復しなければならぬ所が沢山ある。僕は非常にこの時、感じた。

別れてから坪井君、川島君、波多野君、松永君、垣内君、山路君等と、森本先生のお所へ行つたが、誰一人として所を知る者はなかった。方向に依つて道を使つて行く。或る家で聞いた。その時お隣ですといった。そこで、先生の家へ入って、名刺をずらりと並べて、次に石黒先生の方向へ足を運んだ。山の手線を越して、空気のよい所に出た。その辺には矢島という家が非常に多くあった。

(矢島一統があゝの辺の土地を持つて居るのでしよう) [短評]

終に先生の御所に達した。それから戻つて家路を指した。松永君は途中で家にかえる。4人で(坪内君は以前に別れる)電車の通る街路を戻した。途中、酒に酔ったのであろう、よつぱらいが道を彼方此方と酔い歩いて行くのを見た。凄かった。途中、波多野君と山路君に別れて3人でなお歩いて戻った。やがて坪井君と一緒に話しながら3、4の停車場を打過ぎて僕の家に着いた。坪井君はなお向かった。

着くやいなや、楽しみとしていた朝日新聞の幡随院長兵衛(1)を読んだ。やがて昼食をすませた。風が上っていた。僕はボール放つたりトランプをして過ごした。夜、トランプ



を家中でしたが、僕が一番であった。そのころからそろそろ雨が降りだした。その次に歌留多をしてその夜はねた。幡随院長兵衛を切りとって置いた。以後切りとって集める計画。消灯10時。

(それは結構な計画) (短評)

○1917年1月2日 (火)

雪。試筆(書き初め)。雨の音を聞きつつ、次第に睡眠に陥った。やがて雨の音もおさまって何時の間にか雪とは変化したのである。

起床8時。起きて見れば、早脇にねておられる筈の兄の床の布団ははがれてあった。驚いて起きて見れば、早8時になっていた。雨の音は何時の間にか静かな、音をたてない雪の音と変わっているのであった。雨戸の間から首を出して見ると、急に折からの寒風に身を縮める。かなり積もっていた。全く目を覚ました。白く白く雪は僕の日を驚かした。戸を開けて下へ下りた。兄は6時頃、家を出てお墓参りに行き、二軒廻っておかえりになるのであった。僕は昨日行く約束をしてすっかり夢の中に忘れ、遅起きしてしまった。恐縮、恥辱の至りである。先生にもいわれて居る。朝寝をしてはよくないということとは耳にいたく入っている所である。また「長者と約して遅るるは礼に非ず」とあった。

雪はなおも降りつづけて、やむ色は毫もない。雑煮を昨日よりも多く食べた。朝飯は9時頃であった。幼年学校の青木君の兄の喬たかしさんが見えた。兄は今日、不時呼集があつてその後に剣道の仕合があるので遅くなるそうであるので先に食べた。

面白く愉快に時を送った。親類から年始に3、4人来られた。夜は百人一首やトランプをしたが、今日は敗戦に終った。幡随院長兵衛の話に興味を得て来た(3)がたのしみである。雪はやんだ様である。消灯10時。

○1917年1月3日 (水)

晴天。元始祭。起床7時半。下駄に妻革(爪掛)を着ける。妻革は全く初めてなのである。午前、伝通院までずめやきを買に行く。吉原へそれとほかのものをもって行く。

午前11時頃、浅嘉町の親類の所に行った。始め吉原の家に年始に行った。そこで中食を戴いた。それから青木の家へ行った。青木で泰彦君と相撲をしたり毬で家の中で工夫をして遊びを考え、雪で、或る物に当てたり色々遊んで、5時半頃夕飯を戴いて、三弦さんと四郎君と一緒に僕の家へかえった。道がわるかったのが、風が吹いたのでか、道は乾き氷つて下駄の音は真に寂かならば澄み切って聞こえるのであろう。月は東天に高く寒く煌々と照って、星も光っていた。実に日の暮れるのは早くなった。家へ着くと、青木の叔母の従兄従姉二人は既に来て居られた。皆で9人になった。

今年は少なかったが親類ばかりであった。待ち受けの歌留多会を開始した。始めの3回程

は連敗した。そこで休憩して茶菓子を食べる。次には負勝勝という様な有様になった。1回ごとに組はかえた。3回終えるとまた休憩する。その時は9時頃であった。その時、五明(親類)の豊美さんが来られた。豊美さんは宿に宿って居られたが、今日かえって見ればその宿(小さくて宿とはいえない)をもっている家は朝、上野駅から何処かへ出て行つたそうである。荷物一つもとられてはいなかったそうである。家はからになっていたと。なんと無責任なことであろうと、皆口にする。2日間出るからと2日前に言っておいたということである。くわしく話を聞いた。

トランプ会と歌留多会。その次に歌留多はつまりらないというので、トランプをやることにした。叔母と母は外でお話をなさることになった。全体8人で「ナポレオン」というトランプをした。面白く愉快に11時まで過ぎた。実に時は夢の間に打ち過ぎた。11時皆かえるとき外へ出て見ると、無数の星、粉をこぼしたるが如く踊れて、月は以前として煌々と照り、青白い光は屋根に落ちる。それから(豊美さんは泊まれた)、すぐに床を敷いて床に着いた。消灯11時半。

○1917年1月4日(木)

晴天。起床9時。午後2時頃、外の湯に行つた。人は殆ど居なかった。兄が行つたが、目方を僕は計つて見たが7貫720匁(28.95kg)で、兄は僕の約倍になっていた。午後から英語をした。就床9時。

○1917年1月5日(金)

晴天。新年宴会。起床8時。午前は勉強をした。午後3時頃、五明の叔母(大田家4女、たか)がお出でになる。夕飯後、兄と3回ゲームでしたが、僕は2回勝利を得た(トランプ)。

母は婚礼に呼ばれた。しかし以前に度々呼ばれるが、それより余程早くかえつて来られた。その間、伯母の御相手をしていなければならなかった。

兄は、今日もかえつて来られた。友達の石川という友達と5時まで二階に遊んでおられた。昼前に伝通院へすずめやきを買に行つた。それは佐渡の叔父の所へ御送りする為に買ったのである。まだほかに二品あった。その小包を出しに行つた。午後から二度葉書を出しに行く。手紙を出したかえり外が騒がしいので、急いで家へついて二階へ上つて、望遠鏡を持って屋根へ出た。生憎、雪が残っていたのでその足の冷たいこと、とても止まっていられなかったのだ、見にくくはあつたが雪をさけて見た。全部複葉であつた。東南から鳥のつれだつてくる様になってくる。見ると海軍飛行機である。就床9時。〔白雪の富士の遠景のスケッチあり〕



○1917年1月6日 (土)

晴天。起床8時20分前。伯母は今日の午前にかえられた。新聞を読んだり話をしている中に10時になる。そこで二階へ上って、日記をつけ博物をすこし復習する中に12時半になる。午後1時すこし過ぎた頃から3時半まで勉強をして出掛ける。

母の使いであるが、それは菊屋橋のそばの宗円寺という寺に御年始に行くことである。僕はまだそこへ行つたことがないが、よくわかりそうである。僕が外套を着ないで行こうとすると、母が着て行けという。僕はそこで考えた。もし今年着なければ、来年は小さくを着れなくなるだろうし、また今年裏を直して戴いたのを空しく過ごすのも惜しいので、着ることにした。

こま下駄が非常によごれていたもので、例の3日に買つていただいた妻革の着いた下駄を履いて出掛けた。厩橋行に乗って、上野広小路で乗りかえる。下りるやいなや伊藤呉服店の建築物が目についた。広告で見たよりも案外に大きくない様に思われた。上野行に乗り換えて菊屋橋に向かった〔宗円寺付近の地図あり〕。上野停車場目前に来ると、汽車が到着したのか、人がぞろぞろと停車場から荷物を手にして来る。広小路の方へ行く電車は満員である。それから5、6の停留場を過ぎたのか、暫くすると菊屋橋停留場に着く。運よく便所があった。思ったとおりすぐ宗円寺は橋の向こうに見えた。外套を脱いで宗円寺の門に入る。家へよく来る僧が井戸側で仕事をしていた。先ず「おめでとうございます」と挨拶する。それから御年玉を渡して、再び電車に乗る。中で上級生に会った。此度は非常に混んだ。中より辛くてして電車を下りた時、風が吹く。江戸川行きに乗り換えた。電車が出るとき後から自転車と二頭馬車が来る。それは電車道に沿って着いて来る。自転車に乗った人は寒そうであつた。天神下から坂を上った。中腹あたりから馬は鼻息荒くなる。自転車の人もくたびれたと見えるけれども、更に電車を追い越そうとスピードをかけている。終に勝負は決しなかった。馬には鞭を盛んに加える。少し同情を与えるしだいであつた〔二頭の鼻息あらい馬の顔のスケッチあり〕。自然に『黒馬物語』のことを思い浮かべる。本郷三丁目では本郷白山行に乗る。さかなまちで下りて、青木の家へ行く。日は既に没しかけて電灯より光を出す頃であつた。

着くと今、食事最中であつた。僕は途中からお膳に着いた。終つて1時間ほど炬燵に入つて休んだ。それからいよいよ二階へ行つた。そのとき2年の尼子という人が来ておられた。やがて大勢集まる。かるたを5回ほどして、銭まわしや、名はしらないが非常に愉快な面白い遊びをする。その間に休憩をして茶、菓子を食べ、面白くなるた会を終わらせた。まだトランプもした。12時40分前に暇をしてかえる。実に今日の様な面白い大きな遊びは書き記せない。しかしその時の様子はよく思い出すが出来る。

門外へ出ると、四囲唯寂寞として涼しい風が吹いて、恰も水を飲んだ様な氣持がした。人の往還は全く絶えて、ただ交番の巡査とおでんを売り歩く者だけであつた。白山にでると、



電車の運転手、車掌と乗客の僅かである。僕等、母、兄、姉、僕は歩いてかえろうとする。星は天に満ちて、月は秋の月の如く澄み切っている。あたりは寔としているが、月、星、風を友として気持よく歩いた。白山の坂を下り、聾啞学校に向かつて上った。片側の土手には雪が残っていた。道に流れている水は凍って滑る。坂を上りあがつて空を見た時、兄に聞いた。先ず北斗七星は明らかに見た。次に北極星、金星を見た〔北斗七星、北極星、金星の図あり〕。二子という星も見た。涼しい風に吹かれ、新鮮な空気吸って実に気持よく歩いて家に着いた。火の番が廻っていた。12時半頃、家に着いた。1時頃ねる。

○1917年1月7日 (日)

晴天。起床8時。一日家に居た。風が凧を上げるのに適当しているので、沢山上っていた。僕は今日上げたくてたまらなかった。就床9時。

○1917年1月8日 (月)

晴天。起床7時。学校から帰って、本石町の宝文館に広瀬君、坪井君、喜田君等と行く。風は強く吹いてほこりがあった。話しながら歩く中に神田に着いた。三省堂で聞いたけれどもなかった(常山紀談抄)。そこで本石町まで足を延ばす。非常にあった。その上ほこりで聊か悲観した。かえりも歩いた。

家へ着くやいなや、顔を洗った。その時、一番上の兄〔政美〕は朝からの病気に寝ていた。二番目の兄〔龍二〕は観兵式からかえって来られた。暫くすると用を母にいつかる。それは母と蜜柑箱をさげ、外に軽い荷物がある、それを持ってお茶の水橋の井上眼下病院に行った。僕は門まで持って行ってかえった。

常山紀談抄〔江戸時代中期に成立した逸話集〕は家に2冊あったのであった。そこで僕は全く悲観して、全く気のきかなかったことを悔いたが、最早苦勞して行つて来た後であった。晚餐はところが出ていた。ちよつと予習してねる。就床9時。

(孔子曰く「道は近きにあり、而して人之を遠きに求む」と)〔短評〕

○1917年1月9日 (火)

晴天。起床7時。3学期の一番初めの授業を受けた日であった。朝は非常に寒く、手に感じがなくなつた。雪合戦をする(学校に於て)。雪が氷って氷となつてゐる。僕は耳に一度当てられて血の出る程痛かつた。実に痛快であつた。就床10時。

(達者に精神を入れてかかれたり。新年初頭にあたつて此くの如き日記を知るのは痛快な

り)〔短評〕



○1917年1月10日 (水)

晴天。起床7時。常山紀談抄は塩井君に譲った。今日から寒稽古があった。5本やつて僕はかえった。その中の1本は斬りかえしであった。しかし僕は入れてかぞえた。引きつぎの戦いを休み時間にやる。僕の方は牧田君と広瀬君と上村君と菊池君と美濃部君と僕である。敵は、喜田君、芳賀君、表君、渋谷君等である。

家へかえった時、先ず口にでたのは昼食のことである。鞆を下して弁当を食し、なお食した(学校で食べられなかった。箸を忘れたのである)。就床9時半。

○1917年1月11日 (木)

晴天。起床7時。地理は非常に早く進めて新潟県に入って、鐘が鳴ったので早くやった。続いてあわてて習字室に行った。急いだために筆まきをわすれた。しかし幸にも筆があった。今日も寒稽古をした。就床10時。

○1917年1月12日 (金)

晴天。起床7時。大相撲が始まる。今日の作文の題は非常に書きにくく思った。唱歌の時間、歌を読んだ時、都大路というのを「大路都」と読んだので哄笑の声室に溢れる。先ず失敗を演じた。就床8時。

○1917年1月13日 (土)

晴後雨後晴。起床7時。正午後1時間程運動場で遊んで道場に向かった。3時まで2時間ほどして9本した。帰る時、西洋人と本校とでフットボールの仕合をしていた。面白く30分程見た。そこへ雨が降って来たので僕は家へと急いだ。着くと武田君が兄の所へ病氣見舞いに来られた。そこで遊んで夕飯をたべて、すませて休憩している所へ青木君とそのすぐ上の兄の実さんと来られた。矢張見舞いのためと用との二つを兼ねてであった。

11時頃、武田君と実さんはかえられた。その時、四郎君と兄の用を言いつかって伝通院まで本を買いに行った。殆ど店の戸は閉められてあった。北斗七星が柄杓の形になつ見えた。本はなかった。僕等の床に着いた時は既に11時半であった。

○1917年1月14日 (日)

晴天。起床4時20分。目覚まし時計をかけて置いたが、睡眠に深く陥っていたので、その音は耳に毫も触れなかった。青木君はそれに気付いて目を覚ました。そして僕を起こした。20分程早いので即ち再び眠った。次には氣持よく起きられた。和服に着替えて支度を整えて炬燵の室へ来た時は、4時半であった。母が焼いてあたたためて置いてくださった餅を三つ程食べて、菓子をも二つに、蜜柑を一つ食べて、兄のマントを借りて出掛けた。青木君も



同じく自分の兄のを借りていた。長さは今や踵に至らんとしている。途中、学校の友達5、6人に会った。やがて朝の新鮮なる空気を吸い涼しい風に当たって登校した。時はまだ早く、東天も月光に服しているところであった。

(始めての経験で色々な感想が湧くでしょう)〔短評〕

西の空に高く上り、校舎の蔭を映していた。5時に着いた。火鉢の火は赤い舌を出していた。いよいよ寒稽古に取りかかった。終には案の如く身体に熱気を感じて来た。9本程した。終えて家に戻った。その時は電車も人も通っていた。

7時頃まで青木君と遊んで、7時から8時頃まで毬^{ほう}抛りをした。次は朝飯であったが、食べられなかった。しかし二碗であった。すむとすぐに僕は用を言いつかった。青木君は用があるのですぐ家へかえった。それは兄の薬を吾妻病院に取りに行くことである。すこしは悲観であったが、出掛けた。非常に足を早めて歩いた。迷いなく吾妻病院に着いた。往復で40分位かかった。それから直ちに青木に遊びに行つた。僕等小さいものでかくれんぼ、トランプ、相撲、毬抛りなど、種々の面白い遊びをした。7時に暇した。本郷三丁目で乗り換える時、相撲の今日の勝負如何と掲示されている前に立って見た。就床10時。

○1917年1月15日 (月)

晴天。起床7時。学校が退けると3時半まで遊んでかえった。履歴書が出ていた。雲が空に漲っていた。就床11時。

○1917年1月16日 (火)

晴天。起床7時10分。朝は寒くなかった。日の光は非常に薄く日がさしているとは思われなかった。

○1917年1月17日 (水)

曇天。起床7時。寒い日であったが、授業が終ると剣道場に向かった。今日は出席者はいたつて少数であった。着けば4時半、空腹であるから、夕飯はとろろを思うがままに食したので実に満腹となった。今日も薬湯が湧いた。就床9時半。

○1917年1月18日 (木)

晴天。起床7時15分前。習字の時間に森本先生から白石君の病気の事をうかがった。一同急に静まり、同情の念を面に湛えざるもの一人として居なかった。

僕は今日、ゲートルを忘れたので甲級の者に借りた。兵式体操の時間、蓮見先生の閤魔帳に載せられた。実に如何のしだいである。今日は比較的暖かなので出席者が多い(剣道)。近頃、鼻と喉をわるくしてこまっている。柚^{ゆず}の湯が湧いた。香プンと鼻を突いて非常によ



い気持がした。就床10時。

○1917年1月19日 (金)

晴天。起床7時。国語は例の金貨銅貨物語である。痛快でたまらない。剣道はすんだし、田村先生がお休みなので僕等は早くかえることが出来た。帰宅すると、床を敷いてねた。鼻がつまって気分がふさぐ。就床6時半。

○1917年1月20日 (土)

晴天。起床8時。耳鼻脳薬を2回つけた。頭痛が時々して熱も出た。擬戦の有様を夢にも見る事が出来なかった。何方が勝ったであろうか。まだ僕にはわからない。今日は3時間程、本に読み耽っていた。一日中、床に寝ていた。天気がよいので、羨望に耐えられなかった。就床7時。

○1917年1月21日 (日)

晴天。熱(朝6度3分、正午7度1分、3時7度3分)。病氣は遂に寒稽古の皆出席の志を遮った。青木君は例の如く家から出掛けた。今日も一日床に着いて、或は本を読み、或は眠って薬を飲んだ。昨日より熱は高くあった。就床7時。

(残念!) (短評)

○1917年1月22日 (月)

晴天。僕は2時間毎に水薬と散薬とを飲む。朝は熱が6度8分であった。正午は7度3分であった。牛乳、食事などは薬の間に飲み食べる。午後3時熱7度8分。午後3時半頃医者(親類の叔父「青木三奎?」)が見舞いに来てくださった。そうして診察してくださった(僕の病氣は風邪であります)。

○1917年1月23日 (火)

晴天。熱、朝6度3分、正午6度4分、3時6度7分、6時6度7分。薬が忽ち効能があったのであろう。武田君が学校の帰りに見舞いに来てくれた。そして絵葉書(3枚)を持って来てくれた。それも武田君が自分で常にすきだといっている絵葉書であった。親切なのに喜んだ。そして1時間半位、遊んで行った。

○1917年1月24日 (水)

風が強く吹いた。寒い。近頃、新聞が大変である(議会の議論)。今朝、武田君が『世界の奇蹟』という本を貸してくれた。かえりに再び来てくれた。今日、叔父が来てくださった



「金曜日には学校へ出てよい」といわれた。僕はその事全く嬉しく思った。熱朝6度3分、正午6度2分、3時6度4分。非常によくなった。

○1917年1月25日 (木)

晴天。今日は殆どよくなって、床から離れて寂かにしていた。勉強をわすれていたが、今は各課目はどのへんであるかと思つて、本も見た。休んだばかりのときよりは心が落着いて来た。時計の時を刻むのは早い。忽ち夜にはいった。

○1917年1月26日 (金)

晴天。起床7時。五明の伯母が来られる。学校へ行かれるのかと思えばそうではない。10時頃、電車で叔父の所へ診察していただきに行つた。前から泰彦君が病氣であることを知っていたので、僕は見舞うために僕の一番好んでいる絵葉書を10枚ほど持つて行つて上げた。喜んで受け取つた。早速、絵葉書箱を取り出して1等、2等、3等と分けてある絵葉書の中の1等、2等に益されたのが僕も嬉しかった。12時すこし過ぎに家に着いた。まだ薬は戴くしだいであつた。ずいぶん長く学校を休んだので変な氣持がする。土曜日(翌日)が待ちどろしい。

○1917年1月27日 (土)

晴天。久しぶりで正服を着して学校へ向かつた。体操は医者の方で休んだ。余り病人らしく元氣がない様に見えるけれども、自分では全然なおつてしまった様な氣がしている。一番上の兄「政美」が7時頃かえつてこられて、外へでて9時頃帰られた。8時頃、青木君が和服にマントで来た。それから皆で10時まで愉快に時を送つた。10時、青木君と床に入った。すると兄も姉らも床にそろそろ着き始めた。金曜から泊まつて居られる五明の伯母と母は炬燵のある室、即ち僕等のねている室に来られる。やがてお休みになり二階に上られる。四辺は暗みである。足の側の柱に掛かれる柱時計は相も変わらず鳴っている。枕の側に立てる目覚時計はその大なる音をもつてかちかちと耳を打つ。二つの時計は互いに時を刻んでいる。そのうちに柱時計は11時を報じた。

○1917年1月28日 (日)

晴天。午前10時頃、診察して戴きに行つた。午後3時半頃まで遊んでかえつた。

○1917年1月29日 (月)

晴天。地理の時間には幻灯であつた。算術は今、比例を習っているが、この頃休んだためにちつともわからない。まだ剣道は見学であつた。今日は晴やかな天氣で空は純粹の青



色を湛えていて非常に気持がよい。夕方、思いついて富士を見ればその美しい姿は夕日を浴びて一層白くなる。時はほんとと打ち過ぎて、即ち寝る時刻も到来した。就床10時。

○1917年1月30日 (火)

晴天。英語の先生が今日かわられた。今日は昨日の晩、比例を覚えたのでよくわかった。今日は孝明天皇祭(孝明天皇が崩御した日である1月30日に行われる宮中祭祀)の50年祭である。国旗の立っている家が少なかつた。

○1917年1月31日 (水)

晴天。算術の宿題は、最早忘れて室を去ろうとしたとき気がつかれて、出たので皆はがっかりした。5時に家を出て竹早町の停留場で待ったが、来る電車悉く満員であるので、已むを得ず歩くことにした。まもなく横腹が痛くなつたが、腹に力を入れている中になおった。早く歩いた為、汗が顔を流れる。5時40分頃着いた。やがて席をしめて時の来るのを待った。有益な活動写真であつた。8時40分ころに終つた。家へ着くと間もなくねた。就床9時半。

○1917年2月1日 (木)

晴天。今日は午後から風が出て、体操はしにくく目に塵が入つた。別に記事がない。

(2月2日閲。万事に氣をつけて元氣で勉強するがよし) [短評]

○1917年2月2日 (金)

晴天。水が冷たいので齒に沁みる。しかし後は気持がよい。寒いけれども雪が降らないので、何だか冬の様な気持にならない。今日の英語の書取は、よく見なかつたのか5つもまちがえた。今日の国語の時間で金貨銅貨物語は終つた。その文の中には、決して高慢心を起こしてはならないということと、つまらないものでも努力すれば遂には上のものを追い越すという様なことがふくまれてあつた。面白く且つ有益な話であつた。

○1917年2月3日 (土)

晴天。節分。非常な風で非常な塵が充満して、目も開けていられない程である。午後2時頃、武田君の家へ病中に見舞いに来てくれた御礼に行った。そうして遊んだ。夜の8時半まで遊んで帰つた。6時半から2時間は二人で相撲の絵を書いた。5時頃、豆まきをした。僕は一番初めに豆をつかんだとき、丁度14つかんだ。福がくるのもあろうか。伝通院の所で坪井君に会つた。家へ着いたのは8時45分であつた。青木君や兄もかえつて居られた。遊ぼうというので10時まで遊んだ。

(きつと福がきましよう) [短評]



○1917年2月4日 (日)

晴天。5時10分前に眠い目をこすつて起きた。5時5分前に家を出た。今日は月が見えない。今日は寒稽古に加わつてした。終つて、やがて慰労会が開かれた。それが終わるとちよつと撮影しかへつた。家へ着いても朝食をたべなかつた。算術の宿題をすませて、斬髪しに行つた。それから湯に入りに行つた。12時に家をでて、兄に活動へつれて行つて戴いた。活動は非常に久しく行かなかつたので面白かつた。家へ着いたのは5時頃であつた7時頃から勉強をして10時頃、床に着いた。

○1917年2月5日 (月)

晴天。地理の時間は幻灯をした。この頃は同じく第2運動場で「ぞ」鬼という遊びをしている。松本君は今まで皆勤していたのに、今日休んだとはさぞ残念なことであろう。僕は今日、今までになく多くした(14本)。これから段々忙しくなるであろう。なんだか時間が貴くなつてきたような気がする。

○1917年2月6日 (火)

晴天。朝、僕の靴をなおすために久保へもつて行つた。学校からかへつたのは4時すこし前であつた。何だか今日はねむかつた。7時頃から勉強にうつつた。

○1917年2月7日 (水)

晴天。今日は僕の誕生日である「満13才」。別に記事なし。

○1917年2月8日 (木)

晴天。早く風に向かつて歩いて来る為か、登校して集まる時はほかほかとして、外套等は着たいとも思わない。

国語の試験(失敗す)。今日、国語の時間に3列ずつ右と左に分けて書取をした。丁度(左側)即ち僕の居る方が一つ勝星が多かつた時、僕が出て「砦」という字を「堡」と書したので、双方同点となつた。なお先生は2度やられたが、遂に勝負は決しなかつた。それも僕のためであろう。この前の名誉は即ち此度の失敗と消え失せてしまつた。今日は寒稽古をして帰つた。晩に早く文法の宿題をしてしまおうと1時間半かかつてした。

○1917年2月9日 (金)

晴天。2時間目は国語の時間であつた。加藤先生の一番終りの時間であつた。30分程で「堪忍の字数」という所を終えて、その後御教訓があつた。それは僕等の将来に關してお話であつた。それはまた、学問身体にかんしてのことになる。有益なお話であつた。



今日も毬投げをしようと思つて、毬がなくて出来なかった。今日、家に帰つて4時半頃、二階へ上ると屋根の端の所に若干の蚊が群がつていた。この頃は全く雲が見えない程よい天気である。遠くの空が白く明るくなっている。やがて紅をそめ、やがて消え行く。何だか早く立つ様な気がする。湯に入ったりする中に時は即ち過ぎてしまふ。

○1917年2月10日 (土)

晴天。体操の時間は寒かった。今日はデットボール、フットボール等をした。デットボールは今日は終りまで生き残った。僕はこの遊びが好きな方である。今日は明日が紀元節であるから湯に入り、体を清めた。

○1917年2月11日 (日)

快晴、晴天。紀元節〔古事記や日本書紀で日本の初代天皇とされる神武天皇の即位日をもって定めた祝日〕。6時半に床を離れた。朝から空は蒼天の様にはれぱれとして、その中には暖かな光が満ちていた。7時10分に家を出た。学校の門前に来ると、例の堂々たる日の丸の国旗は風にもたれている。時は早いので、納富君、菊池君 (乙) 等と三角形を描いて毬投げをした。

式が終つてから写真を写した (小学の者で)。桐陰会記念刀の会があつた。初めに開会の辞の次、記念刀の歌を歌った。波多野主事先生の演説があつた。その時、記念刀を抜かれた。次に委員長木内さん及び5年の人 (名をわすれました) の演説があり、次に有志演説の所で先輩の3人の方々が演説をなされた。何れも勿論わが桐陰会〔東京高等師範学校附属高等学校中学校の同窓会〕会員に対しての教訓的の演説であつた。終に気をゆつたりとさせる様な講談 (余興) を講師が来て話した。最後に桐陰会々歌を歌った。次は閉会の辞 (茶菓解散) という様な順であつた。家に着いたのが2時15分であつた。段々風が吹きだした。

○1917年2月12日 (月)

北風。上村君が休んだ。地理は今日で中部地方を全部終えた。休みの時間に吉松君とノックをした。毬は忘れずに学校へ来るとき手に握つて来た。剣道の時間から風が段々強くなつて、家へかえるときは運動場には土煙が湧いて校舎に打ちかかっている。

○1917年2月13日 (火)

朝はまだ空気が乾燥していないので、風はあつたが塵は立たなかつた。やがて日が照り出して地が暖かくなると、運動場は砂煙に包まれる。上村君は今日も休んだ。今日もノックをした。この頃は算術の宿題が絶えず出る。



○1917年2月14日 (水)

体操の時間には例の第1運動場には非常に寒い強い風が吹く。また風は運動場を掃く様に砂を巻き上げている。実に目も口も開けていられなかった。体操が終つて見ると、皆の鼻は真黒になっている。室に入ると、もつとする。これもいやな気持であつた。3時半頃家に着いた。10時半頃、床に着いた。

(暫時此の様な風ふきを覚悟せねはならぬ) [短評]

○1917年2月15日 (木)

風静まる。習字は筆が新しいので書きやすかった。地理は近畿地方へ入った。近頃の英語はむずかしい。今日は習字の時間に日記を出すことを忘れ、遂にかえりまで忘れてしまった。兵式体操の時間に飛行機が飛んでいるのを見た(2台)。1台は僕が一番初めに見つけた。今日、大演習の地図が来た。納富君に地理の筆記帳を借りた。それは僕は静岡県と愛知県のを休んだからである。

○1917年2月16日 (金)

英語の書取は割合にむずかしかった。明日の擬戦に行きたかったが、許しは出なかった。

○1917年2月17日 (土)

晴天。7時に起きて見れば好天気である。正午から午後1時半にかけて風を作った。風を遂に成功して、よく上った(英語の本を見て作った)〔空に上っている風のスケッチあり〕。何方が勝ったであろう。その戦争の有様が目にうつる様である。行けないのが残念である。6時頃、兄はかえつて来られた。

○1917年2月18日 (日)

烈風。今日は非常に強い風が吹きすさんで、縁側は土砂が舞い上つてざらざらしていた。また風がくると時々障子に砂がぶつかる音がする。風の音を聞いていると、海岸に大海が走ってくる様に物凄く聞こえる。この頃、新聞を開くと色々の出来事が目につく。

○1917年2月19日 (月)

晴天。地理は近畿地方へ入った。昼の時に加藤先生(国語の前の先生)が御出でになった。僕等に作文の清書帳をかえしてくださいだったが、その時、先生は、僕等が先生に文を書いて上げた返事として書いてはさんであつた。それがわざわざ封に入っているのである。持つて見ると重いのである。よくも40人全体に此くの如くに丁寧にされたことは、僕の簡単な文を差し上げたのに対して、あまりに熱心になされたので恐縮の至りである。



家へ着くやいなや、即ち僕は封を切つて開いて拝読して、全く先生の御熱心に丁寧に書かれたことに、なんと御礼を言つてよいかわからないのであった。しかも筆で長々と書かれてあった。僕はこれを先生の記念として長く保存して居こうと思つてしまった。

(君方もまじめであつた) [短評]

明日は数学の試験なので準備にとりかかった。

○1917年2月20日 (火)

晴天。今日、算術の試験があつたが大失敗を演じたので随分悲観した。午後5時頃、長野から従姉が来られた。湯に入つてねる。別に記事がない。

○1917年2月21日 (水)

晴天。今日、雪が日中に降つたそうであるが、僕は見なかった。相変わらず作文の宿題は多量である。新聞の幡随院長兵衛は次第に面白くなつて来た。4時半頃、二階へ上ると、日が障子をすかして室の中を暖かくして、中へ入ると暖かく明るい。

○1917年2月22日 (木)

晴天。学校へ着いたのが8時3分、家を出たのが8時である。やつとまにあつた。30分間ほど毬放りをしてかえつた。家へかえつて戸を閉めようとすると、遠くに離れた関東の山々は手にとる様に近く、その輪郭は図にかいた様に見えた。風は時々猛進して戸をゆるわす。

○1917年2月23日 (金)

晴天。首藤君の「紀元節」という題で書いた文は中でも一番名文であつた。剣道は今日は2、3の打ち方を教わつた。今日は4時まで遊んでかえつた。この頃、兄がいらつしやらないので、僕には淋しい。姉の方は遠足であつた。横須賀へ行つて軍艦など種々見て来たそうである。

○1917年2月24日 (土)

晴天。今年の今までの日記をはぐつて見るに、雨天の日は実に一日もないのである。実に東京だけであろう。今日も快晴ともいわれそうな好天気である。水も冷たくなつて来た。日の光も暑くなりだした。僅かの中に3月(春)も来る。

帰宅して作文の清書を終えて、1時間ほど寝た。それから勉強にとりかかった。即ち日が暮れて5時半になった。夕飯をすませて、ゆつくりしたのが7時であつた。9時にねむくなつて来たので床についた。



○1917年2月25日 (日)

晴天。起床7時半。8時まで新聞を読んだ。朝飯をすまして二階へ行くと、母はお雛様をかぎって居られた。二階がちらかっていたので下へ下りて本を読んで、すむのをまった。その中に飛行機の音がするので、あわてて二階へ上って望遠鏡を取り出して急いで屋根へ駆け上って望遠鏡を開いた時、丁度屋根の南の上を飛んでいた。よく飛行機を見ることが出来た。所沢を目掛けて驀進して行く。唯一機であった。

今日は一日中、家に居た。実に外へ出たい気がしたが出る処はない。つまらない日であった。しかし兄が帰って来たので、相手が出来てつまらなくもなかった。

(2月26日閏。よくからだを大切にして勉強なさい)〔短評〕

○1917年2月26日 (月)

晴天。この頃、修身がすきになった。今日は社会という所であった。地理、歴史の時間は好きであるけれども、覚えるのがあまりすきでない。算術の臨時試験の後、算術がばかにおちた様な気がする。かく思っているのは先のことが身に入らないから、努力しなければならぬ心が勃々と起きたので、家へかえって直ちにとりかかった。これから次第に励んでやらないと遅い。

今日の剣道の時間にはこの前すこし気持がわるくて元気がでなかったもので、教生の先生に元気がないぞと云われたので、会稽かいけいの恥とその先生に向かった時には、一層元氣を出してあらんかぎりの力を尽くして、打ち飛びかかっていた。

(それはえらい)〔短評〕

元氣にまかせ肘をしたたか打ったので、血がにじんだ様である。元氣の過失であるから、一方から考えればあまりよいことではないが、名誉であろう。終に恥そそを雪いだ様な気持がした。

夕方、戸を閉めて夕飯をすまして、ひとまず炬燵に休憩をしにあたって、新聞をひろげた頃、ポツポツと外に音がする。ことにトタン屋根を打つ音は明瞭にポツポツと響いた。はては雨かとめずらしく思つて、雨戸を開けて見れば、折からの瓦斯の光に銀色を呈した。美觀ともいふべきである。めずらしい雨に目がさめた様である。隣に「雨が降って来ましたよ」と女の声がする。実に今年の初雨であった。

○1917年2月27日 (火)

雨天、寒い日。目を覚ませばこは如何に、7時半ではないか。驚いてはね起きた。雨は今を盛りと降るのであった。向かいの家の戸は閉じられてある。それもそのはずその家は日曜日に移転したのである。門を出るやいなや僕は矢の如く走ろうとしたが、なにしろ雨の日、風もある。速力はけずられてしまつて、雨風の防御のために分配せざるを得ない。こは如



何に？ 竹早町の停留場の時計を見れば、8時1分である。あらんかぎりを尽くして走った。大塚車庫前では時計を見るいともなく、傘をつぼめて走った。玄関へ来たときにすでに2鈴が鳴り終ったのであった。さては遅刻しては大変と夢中になってかけた。終に遅刻はまぬがれたが、ますます気持がわるくなつて、耳のあたりがいたくなつて来たが、2時間目が終わった頃には全くなおった。今日こそは後悔したのである。朝寝は決してするものではないとつくづく思った。(このことを今日は主にかくことが目的である。日記は思ったことを書くことが大切であると思う)

(よい教訓)〔短評〕

○1917年2月28日 (水)

晴天。昨日は一日中、雨が降りつづけた。そうして昨日は非常に寒かった。今日は夕残なく晴れた。今日は全く安全な時刻に起きた。上村君が数学の時間に俄然戸を開けてはいった。と同時に笑聲をもらした。僕もその一人であった。上村君も笑っていた。

夜、僕の所へ速達郵便が来た。兄の所からであろうと思った。案の如くそうであった。中にはちよつとした手紙と共に明日の一高の記念祭に入る切符が3枚入っていた。まだ家は僕に1枚あったがこんなにいらぬ。姉も既に持っている。1枚を友達に姉が上げるそうであるから渡した。僕は今、ポケットに3枚もっている。明日誰れかに上げよう。

6年余も継続して家に居た女中が今日、結婚したので、家を去った。実に家の生まれてからの一番好きな女中である。彼の女は僕を愛し僕も彼の女を愛していた。行くときに胸が一ぱいになるといった。僕もなんだか変な気がした。

(そんな女中は珍しい)〔短評〕

○1917年3月1日 (木)

春が来た。晴天。実に今日から真の春に入った。風はまだ北風であった。空は青々とした蒼天であった。昼の食後窓から首を出した。すると、宮脇君が一方の窓から首を出した。そして宮脇君が「春の日に窓より首を出しにけり」と云った。僕は「冬の日に窓より首を出しにけり」と云ったりなどして笑った。実に春の如くに暖かであった。

(なかなか風流だ)〔短評〕

小出君と芳賀君と僕とで一高の記念祭を見に行く約束をした。小出君と芳賀君は(Zo money)お金を持って居なかった。僕が幸に持っていたのでよかった。

(僕も金を持たずにいった。とうとう寮歌集をかわされた)〔短評〕

電車の中で小出君は面白い英語の本をみせてくれた。僕もその種類のをもっている。また小出君は植物学の非常に細かい字でかいた本を読んでいるので驚いた。一高の記念祭の中には相変わらず椅子を倒^{サカサ}まにして蠟燭が中に立ててある。面白く4時まで1時間半程見



てかえった。〔逆さまに壁に立てかけられた椅子のスケッチあり〕

(3月2日閲、ためになる日記)〔短評〕

○1917年3月2日 (金)

晴天。図画は今、鞆を書いている。2時間目の作文は何という題かと思っていると随意選題であつた(それは擬戦を休んだものことである)。題を選ぶのに20分もかかったので、終に書ききれなかった。Macmillan Readers「マクミランリーダーズ」は今日で殆ど終った。唱歌は甲乙合併であつた。

○1917年3月3日 (土)

晴天。今度の算術の先生は一番痛快である。実に1時間の中に僕等をわらわせないことはない。今日一番感じてわらつたのは、坪井君がある問題をといて説明していた時、「だまかされちゃあいかなぞ」「わるい所があつたらすぐつこめつこめ」といったことである。夜、ちよつと兄がかえつて来た。

○1917年3月4日 (日)

午前9時頃雨晴れる。後晴天となる。遠足延期す。朝4時頃、目が開いた時に雨がしきりに降っていた。その後再び眠つたが、起きた時も雨は以前と同じ音で降りつづけていた。これでは今日も遠足は挙行されないであろう。午後2時頃、幼年校の兄〔龍二〕がかえつて来られた。10時頃ねた。

○1917年3月5日 (月)

晴天。この頃、実に暖かくて朝は全く春の様に思われた。今日で修身は終った。今日、国語の時間、例の2組に別れて書取をした。その時僕は指された。書く字は「癖者」という字であつた。僕はそれを「癖者」と。どこが誤っているでしょうか？ 癖者の「者」〔旧字体〕という字の点をぬかしたのである。小学校でならつたのをそのまま覚えていたからである。それにはちよつとした語争いもでた。

○1917年3月6日 (火)

晴天。学校からかえつてねむけがさしたので、1時間ほどほかほかと日を受けた暖かい室へねこんだ。文法の宿題をやり、博物の清書をした。その次に例の準備にかかった。

○1917年3月7日 (水)

晴天。今日は何にも書くことがない。



○1917年3月8日 (木)

晴天。今日は中学の入学試験である。僕は見る必要があるので、5時まで残っていた。それは長井君、加藤君、井上君、森君、吾妻君、井本君、稲田君、伊藤君、団君等である。いざ発表となると青くなった。入学受験者は自分の名の掲示されるかされないか、及第か落第か、関ヶ原の戦。或るものは喜んで胸を叩き笑を湛え、或る者は心配してその面は碧い。実に憐れむべしである。去年の今日を思うと、その心の中をよく察せられた。5時10分頃、帰宅した。

(筋の引いてあるのとないのとの区別如何)〔短評〕

○1917年3月9日 (金)

曇天後雨天。この頃、第2運動場で猿鬼を始めた。非常に面白い。今日も5時まで待っていた。5時までテニスをしていた。4時15分頃、玄関の方へ行った。遂に45分ほど待たされた。今日僕の知っているので入ったのは、井本君と伊藤君と稲田君であった。森君と団君は入れなかったので残念であった。兄は団の入れなかったのを非常に残念に思っていた。試験の順番が発表された。家へかえって井本君へ葉書を出した。

○1917年3月10日 (土) ～ 15日 (木)

〔記載なし〕

○1917年3月16日 (金)

父の命日。

○1917年3月17日 (土)

祖母の命日。修身、地理の試験。

○1917年3月18日 (日)

祖父の命日。

○1917年3月19日 (月)

英語、博物の試験。

○1917年3月20日 (火)

雨天。今日は国語、数学の試験であった。数学の試験を通過するや否や、肩の重荷を下ろした様な気がして、同時に遊心勃勃として脳に^{むちが}叢る。雨はその運動をさまたげるので、

僕は家路に向かった。帰ってゆったりした気をもつて書を読むことにとりかかった。たのしくおもしろく読んでゆつくりとねた。

○1917年3月21日 (水)

晴天。母はこの頃、床につく。僕は今日、午前には随分御用をした気がする。7時半過ぎに起きる。先ず郵便葉書を2枚出しに行った。しばらくたつて電話をかけに行った。かえって新聞の幡随院長兵衛をきりぬいた。今は80程になっている。紙ばさみの中に一ぱいに入っている。その後、母の病氣のために12時程までそばについていた。12時昼食をすまして武田へ遊びに行った。二人で色々遊ぶ中に日は落ちて8時となった。愉快に遊んでかえった。家へついてすぐねた。就床8時50分。

○1917年3月22日 (木)

晴天。8時起床。午前は電話をかけたなり、伝通院の方へ使いに行ったり、薬を買いに行ったりする。午後零時半頃、武田君が来る。1時頃から外でボールをやった。ボールと来たらなかなか飽きない。青木君が2時頃来た。それからなおつづけて3人で3時半すぎ殆ど4時まで抛りつづけていた。それから家へ入って3人とも何年ぶりの王将をやったが、爺父くさくなつてすぐやめた。子供のするべきものでない。その次にトランプの Sixty-six というのをして、ぬきっこをした。その次に(夕方)、またボールをした。8時半頃皆かえった。伯母が二人来られた。

○1917年3月23日 (金)

晴天。7時半頃起きた。8時頃、飛行機を見た。10時半ごろ、水飴を母のために買いに行く。東京一という様な店である。家を出て電車の街道にそって行くと、幼年学校の生徒が三々五々連れ合つて歩いて来る。春日町の坂を下り、壱岐坂下の停留場まで行くと、左側に教えられた坂があつた。それを上って行つた。やがて交番に来了。それより手前というのであるから再び戻つた。主に飴を売っている店があつたが小さいので再び上へ上つた。念のためというので交番をこして本郷通りの方にでた。さては通りをまちがえたかとも一度は思ったが、再び引きかえして、その疑問の店の前に佇んで看板を読んだり、のれんを読んだりしたが、一つも高田の水飴と書いた所がない。栗の水飴とするであつて、水飴や飴が店頭にならべてある。思いきつて店に入つて買い求めて帰路にうつつた。途に機械で大工が木をたやすくなんなくすうすうと斬りだしているのを見た。僕は何時も思う「この砲兵工廠こうしようがないと直に春日町の坂の上にでられるのだなあ」と。丁度1時間で用を足して来た。少しの飴をかく遠方まで買いに行つたことは馬鹿々々しく思うけれども、親に対しては心持のよいことであらうと思う。



午後より武田君の所へ遊びに行った。その時、一部の6年、今は中学1年になった大橋が来たので青木君と武田君と大橋君と僕とでテニスを二人宛組んでした。今日は少し家に都合があるので午後5時に帰った。

○1917年3月24日 (土)

雨天。朝起きて見れば、雨は僕にいやな感じ覚えさせる。それは母の用を足しに何か外に出ることがあるだろうから。例の薬を買いに行く。また電話をかけに行く。雨は降り続ける。叔母が見舞いに来てくださる。そのかえられるとき、一緒に歩いて5、6町さきまで母のために使いに行く。悲観する。家のなかでもこの頃は、僕は一番奔走している。

○1917年3月25 (日)

晴天。午前8時より修業式があつた。4年以下の修業証書を主事先生より各組の総代が出て戴く。次に皆勤者及び精勤者の各組の名を呼んで、その総代が皆勤証、精勤証を戴いた。次に剣道の得業生たる平井さん、安藤さんに得業証を渡した。木内さんの演説は僕の耳を非常に傾けさせた。室にかえつて石黒先生、森本先生に御訓話をさずかった。通知表の点は益々さがっていた。奮発の念燃ゆるが如く勃々と起きた。家へかえつて桐陰会雑誌を読んだ。

○1917年3月26日 (月)

晴天。卒業式。今日は仙台の兄〔龍二〕が来られるので、迎えに行かなければならない。卒業式は残念ながら出席する数に入られなかった。午後、国語の予習をした。国語の四は売りきれていた。

○1917年3月27日 (火)

晴天。母は段々よくなる様である。姉が卒業したので、夕飯のときに祝った。武田の叔母が来られた。仙台の兄は午後9時の汽車で仙台へ立たれる。姉と一緒に送りに上野停車場まで行く。停車場で僕の下駄の鼻緒がきれたのでこまった。ようようにして鼻緒をつげた。汽車が発するとすぐ電報をかけた。

○1917年3月28日 (水)

晴天。1月むつき、2月きさらぎ、3月やよい、4月うづき、5月きつき、6月みなつき、7月ふみづき、8月はづき、9月ながつき、10月かみなづき、11月しもつき、12月しわす、を覚える。記事なし。



○1917年3月29日 (木)

雨と雪と午前のうち降る。後晴。炬燵にあたつて新聞を読んで居ると、姉が、雪が降っていると言ふ。障子を開けて庭を見ると、雨と大雪がまじつて降っていた。雪が降ったとは言えない。空気がしめつているのか、12時の午砲がよく響いた。丁度5分進んでいた。

○1917年3月30日 (金)

快晴。12時頃、武田君が誘いに來た。僕は昼食をすませて、洋服に着かえて武田君と一緒に出かけた(高田馬場へまりを抛りに)。時にほかほかと光がさして、眠くなる様な天気。実に春日和であった。青々とした空を頭に戴いて歩いた。竹早町から終点まで、ない様でなかなかある。山の手の乗場へついた時に丁度、電車が來た。やがて高田馬場に着いた。そこで待ち合わせるはずの青木君と彼の兄と弟はまだ來られていない。それから15分待つと次の電車で來た。やがて高田馬場へ着く。多数の士官や士卒が演習を所々方々で行っていた。暫く見とれていた。

やがて、よい場所を見つけてボールをした。暑くなったので上衣を脱いで、面白く愉快に専ら毬抛にとりかかっていた。その中に兵隊が僕等の方へ來る。そこで退却しようとしたが、それは休憩するために來たのであった。合計4個の毬を兵隊に皆とられた。僕等は遊ぶ所を見ていた。実に愉快に遊んでいる(但し初め1個は僕がかした)。さんざんやって皆が飽きたころは4時であった。凡そ2時間半程、一心にした。今日は遂に、しようと思っていたのぞみを達した。凡そ30分程休んで高田馬場を立つた。大塚で武田君とおりて疲れたにもかかわらず勇気を鼓舞して歩いた。途中、花(桜草)を母のために買った。武田君も彼の母の齒のいたいために同じのを買って家へ戻った。母はたいそうよろこばれた。前、女中であつたみきが來ていた。武田君は夕飯を食べてかえる。早く就床する。

○1917年3月31日 (土)

快晴。この間、青木君の兄から竹刀しなを戴いた。短くて細くてぎつしりしている。重さはかなり重いがつかい安い。それで前の貧弱な竹刀をこわして、弓と矢を作った(竹刀と弓と矢と的のスケッチあり)。矢を4本、弓1個、的を作つて、面白くした。すんで、一番よい矢を弓につがえて裏へ行つた。折しもうらみ重なる猫の奴が魚の骨を一心にかじっていた。何と僕はうれしかったであらう。わざと知らぬ顔をして近寄つた。(矢の先は円い)時ぞ!と弓をひきしぼつてねらいを定めて離れた。矢は果たして命中した。丁度、胴の真中に(矢が猫に当たった図あり)。猫は一驚を喫したと見えて、へいに駆けのぼつた。望みを達した。僕は気持よく凱旋した。母に言ふと、忽ちしかられた。次の様な意味に、人と猫とは段ちがいである。その下なものを打つなどは人の面目にかかわる。

〔註:「弓で猫をねらう」については詩集『靈界の星々』の「第一篇生い立ち／乳児時代



「東大時代」に次の句がある。

「本郷の弓町生れの私は弓が好き 竹ぎれで弓を作って金魚を狙う猫を狙った。
それに因^{ちな}んだわけでもないが 天弓^{てんきゅうこうげい}(虹霓) が最後の雅号。」
が最後^{がごう}の雅号。」

○1917年4月1日(日)

晴天。何時^{いつ}もの如く7時に起きた。午前8時半に上野へ着く列車に仙台の兄が乗って来られる。僕は姉とそれにお迎えに行った。7時50分に家を出る。上野へ着いたのが8時10分。8時半までにはまだ20分ある。停車場はいわずとも雑^{ざう}閑^{かん}して、また忙し様に足をはこぶものもある。8時半上野着の列車の着く時は早1分にせまった。まだかまだかと思う中に2分、3分とすぎる。その中に僕は不思議の念を抱いて、改札掛に問うと28分おくれる様である。僕はがっかりして、天井の方「出口の表示灯」を見たり、機関を見たりしてしばらく改札口のわきに佇んでいた。家へついたのが10時。

午前11時頃、幼年校の兄「龍二」と上の兄「政美」とが来られる。午後1時半、青木君と武田君が来た。明日の計画を定めた。30分で明日の計画は定まった。4時までボール等して遊んで帰った(二人)。明日の晴天なることを祈る。

○1917年4月2日(月)

晴天。愉快なる一日。6時半起床。戸の透き間より朝日がさした。嬉しき身に余り、起きるともなし起き上がって、戸を自分であけて下へ下りて行つた。ふと気がついて時計を見上げると6時半である。まだ30分も早い。悉く準備は整った。すると武田君が8時10分前に誘いに来た。9時5分に品川の終点に着いた。青木君はまだ来ていなかった。後、5台目の電車で来た。丁度9時に停留場を出発した。長い品川の街路を話しながら通つたが、長い街路の末はまだ遠方で尽きない。途中、脇道へ入って波のびしゃびしゃうちよせるがけの上に三人腰を下ろして、遠く吹き来る海の風に吹かれて、海の景色を賞していた(15分間)。やがて品川の町はずれに出た。するとすぐに再び町に入った。即ち大森の町である。これも終に家がまばらになる。大森の町を離れた頃、丁度11時であつた。三人やがて弁当がこいしくなつたので、あぜ道をすこし奥へ入って弁当を開いた。

それからの道は長くはあつたが、広々とした田畠をながめつつ行くのであつたから、わけなく六郷川に出た。しかしその頃は、何里歩いたかしらないけれども、くたびれて来た。地図を見ると3分の2は歩いた。それからは速力は落ちたが、足が時計の様に機械的に運ばれて、同じ速度である。大師河原村へ掛かると、全村は大師様のために立てられたのであろう。街村で店は悉く麦藁細工、奈良漬、貝細工でかざられている。お清さんに頼まれた貝細工があつたので、求めた。奈良漬を買おうと思つたがやめた。大師に参拝して家の人にたのまれたおみくじを引いて、その村を去る。羽田の渡しへ出ようと思つて、東へ東



へ進んで、あまり長いので人に聞くと非常に東へより過ぎていた。それから戻った。途中で再びあぜ道へ出て休んだ。残りのものを食した。それから羽田の渡しに出た。田舎は田舎で渡しに乗る人々は知り合いの様に語り合う。向こう岸に着くと左右、それぞれわかれ行く。地図によつて労れた足をひきずつて、ようよう穴守大神につく。此処も大師河原村と同様である。参拝して裏へでる。何百とも数しれない鳥居が重ねてあるのには一驚した。

裏へ出て、ぶらんこ、遊動円木、まるたおとし、機械体操など沢山ある運動場で休むこと30分。それから元気づいてボールやそれぞれの遊び道具で遊んだ。今までのつかれは何処へ行つたのか。三人とも意気全然回復してもつと歩きたい気がした。

それから電車にのつて、意気揚々として家につく。5時半。行程6里半(歩いたのには驚いた)。嗚呼、実に愉快な一日であつた。(品川(出发点)——海岸沿い(京浜電車沿い)——蒲田乗換場——六郷川沿い——大師河原村——羽田街——穴守大神の路程図あり)

